

1. テキスト

「内部知覚について」「七」の第3・4段落。133頁8行目から134頁終わりまで。

2. テキスト解釈

（第3段落続き）

「数学的真理」も「内省的自己」によるのではなく、こうした自己を超越した立場において証明されるのと同様、「内部知覚」もこの立場によって「明白を得る」のである。「所謂内部知覚」が「所謂知覚」と異なるのは、知覚が外界の存在に従うのに対して、内部知覚においては「すべての知識が作用の内容」となる所にある。それが故にすべての知識が作用の内容において「証明せられると考えられる」が、そうではない、それは証明になっていないと西田はここで言おうとしている。「自己の中に自己を見る」という「自由我」はここでは「射影」にすぎないのである。ここで西田は現象学を念頭に置いていることは、第4段落に「現象学的立場は…尚内部知覚の立場を脱したのではない」とあることから明らかである。西田の現象学批判はそこで確認しよう。

「主語となって述語となることなき基体が作用其者となる」における「基体」とは、赤の基体としての色などの「具体的一般者」でもなく、その基体としての「個物」でもなく、その基体としての「働き」でもなく、その基体としての「知るもの」のことである。そうした「知るもの」としての基体そのものに成り切ることによって作用はそこからの作用となるのである。それが「作用其者となる」ということである。単に個物としての基体に成り切るということではない。それによって対象は外にあるのではなく「内に向けられた対象」となるのである。しかもこの「作用其者となる」という「純なる作用となればなる程…対象が対象たる性質を失うことなくして内容の位置に来る」とされる。「対象が対象の位置を失わない」とはその対象が、反省にとってはどこまでも超越的な「客観」であることを言っている。反省が破れたところに現成するものだということである。そうしたものの直観として対象はそのまま「内容の位置に来る」のである。まさに超越にして内在、内在にして超越である。

色は赤でもなければ青でもなく、赤でもあれば青でもある。そうした色そのものに成り切る時、「色は色自身について述語する」ことになる。「対象を指示するということも、作用が対象を外に見るのではなく、自分自身のうちに見る」ことになる。もし「対象」が外にそれだけで存在しているように見えるとすれば、そのような対象は「自己自身の内に映されたる作用の影に過ぎない」。「対象」はエネルギーとしての働きの内に「溶かされるべきもの」（123頁1行目）なのである。このように「対象を作用の外に見ると考えるのは、心理的作用を考える」からである。即ちまず個人があってそれに様々な心理作用が属していると考えられるからである。これに対し「純なる作用の立場に於ては」作用の「内容其者が対象として直に客観的」だとされる。反省にとって対象はどこまでも到達できない客観である。そうした反省が破れる所に現成するのが直観である。そこにおいて対象は対象のままに自己の内容であり、それがそのまま客観的だということになるのである。西田はさらにこれを「芸術的創造作用」に例をとって説明しようとする。芸術の創造作用が「純なる作用」でなく、何かを表現しようとして何らかの「概念的対象」を外に見ているとすれば、それは「主観的」だというのである（この問題は次の「表現作用」に引き継がれる）。逆に言えば対象と一つになったもののみが客観的と言えるのである。

（第4段落）

この段落は現象学批判である。現象学は「単に見る」という立場に立っている以上、それは「すべての立場を除去した純粋現象学立場」とは言えず、現象学はこうした立場に進まねばならない、というのがその趣旨である。現象学は「時の範疇に当嵌った事実我」、つまり経験的な自我を離れているという意味で、「所謂心理学的立場」を離れてはいるが、「尚内部知覚の立場」を脱していない。それによってそれは「記述的心理学の立場」を脱していない、というのである。「単に見る眼という如き知的我」（と一つであるとされる内部知覚）は「尚対象化せられたもの」であり「対象界の一つ」に過ぎない。「内部知覚に於ては、知る者と知られる者と

が合一する」(77頁5行目)と言っても、その合一は厳密ではなく、微小な反省が挟まるということである。反省であればそれが対象とする世界は、どれだけ我が純粹であろうとも外に見られた「対象界」である。この「純粹」というところに「他の対象界」に対する特殊な位置を保証するであろうが、それは「真にすべての立場を除去した純我の世界ではない」し、「他の対象界と外的関係に立つを免れない」とされるのである。

3. 哲学的問い

「すべての立場を除去した立場」というものはあり得るのか。